

## わたしのかぞく

高島市立本庄小学校

2年

あきなが  
秋永 桃花

わたしのかぞくは、お父さんとお母さんとわたしの3人です。そして、秋永のおじいさんとおばあさんがいます。中埜のおじいさんとおばあさんもいます。

お父さんは、朝早くから、夜おそくまで、しごとをがんばっています。休みの日には、いっしょにプールをしたり、いろいろなところに、遊びにつれて行ってくれるので、「つかれているのに、いつもありがとうございます。」と思っています。

お母さんは、とてもやさしいです。この間、ごはんをたべに行った時、車いすの子どもがいるかぞくが、せきを探しているのを見て、「よかつたら、こちらどうぞ。」とせきをゆずっていました。そんなお母さんを見て、わたしもお母さんのように、こまっている人がいたら、声をかけたいと思いました。

秋永のおじいさん、おばあさんは、畑でやさいや花をそだてています。おいしいやさいをくれます。わたしのことを大切にしてくれています。

中埜のおじいさん、おばあさんは、いっしょに、あそんでくれたり、ご

はんには、わたしの大好物をだしてくれて、やさしいです。

わたしのたん生日には、毎年、全員あつまって、たん生日パーティーをして、楽しくすごします。プレゼントももらいます。

わたしは、こんなかぞくが大好きです。

これからも、かぞくみんなでなかよくくらしていきたいです。

## ぼくのさいこうの夏休み

大津市立仰木の里東小学校

2年

いいだ ゆうと  
飯田 結斗

7月26日と27日の2日間、かつら川のキャンプじょうに、ぼくの家ぞくと、友だちの家ぞくで行きました。キャンプじょうにながれている小さな川で、ぼくたちは、おたまじやくしや、小魚をつかまえてあそびました。

おなかもすいてきた夕方。そろそろばんごはんのじゅんびをしないといけません。

今日のメニューは、カレーライスとバーベキューです。ぼくは、カレーライスづくりをしてつだいました。お肉ややさいをいためて、さいごに、カレーのルウを入れて、グングンこみました。ごはんは、はじめてのはんごうにちょうどせんしました。お米と水のりょうにちょっとぴりなやみましたが、おいしくたけることをねがって、はんごうを火にかけました。

ごはんができ上がるまでの間、ぼくとお父さんと2人で、こん虫さいしゅうに行きました。ねらっていたカブトムシにできることはできませんでしたが、木の上に1匹のせなかが赤いトンボがとまっていました。ぼくは、トンボを見つからないようそおっと、ちかづきました。そしてぼくは、手にもったアミをつかって、トンボを捕まえようとしましたが、先にトンボがとんでいき、

つかまえられませんでした。そのとき、お父さんが、もっとしゅう中して、すばやくアミをうごかすといいよと教えてくれました。そして、もういちどぼくは、アミをもち、気あいを入れました。ぼくは、「ええい」と、アミをふりました。「よっしゃー！」アミの中からバタバタと羽がうごく音が聞こえました。自分一人でトンボをつかまえたのははじめてだったので、とてもうれしくなりました。アミの中のトンボを手でつかもうとしましたが、よくうごくので、ちょっとぴりこわかったです。お父さんが、4まいの羽をつかまえたらいいよと教えてくれたので、ぼくは、そっと羽をおさえて、つかまえることができました。ぼくとお父さんが力を合わせてつかまえた大切なトンボは、トンちゃんと名前をつけました。

しばらくすると、「ごはんできたよー。」と、おかあさんの声が聞こえました。はらぺこのぼくはいそいでいすにすわり、おかあさんがかみのおさらには、ごはんとカレーを入れてくれました。「いただきます」「おいしい！おいしい！」と、みんなが言ってくれました。ぼくは、みんながよろこんでくれてとてもうれしくなりました。でもちょっとぴり、ジャガイモがかたかったかな。

よるは、まくらの中、みんなで花火もしました。パチパチと花火がキレイにもえて、さいこうの夏の思い出です。

また、家ぞくでお出かけしたいなあ。

## ママの P T A のおしごとたいけん

大津市立富士見小学校

2年

木村 弥沙

わたしのママは PTA のやくいんをやっています。PTA のおしごとがどんなことなのかわからぬいけれど、ママはいつもスマホやしょるいをみてばかりです。

「ママあそぼう。」  
と、話しかけても  
「ママは、今 PTA のおしごと中だよ。」

とことわられたりします。わたしはすこしさみしい気もちで、ママは一体何がそんなにいそがしいのだろうと思っていました。

夏休みのある日ママが、  
「明日は学校の草ぬきがあるから、今日はそのじゅんびで学校に行くよ。」

と、言いました。ふだんは PTA のおしごとを見ることができないけれど夏休みなので、わたしもいっしょについて行きました。

じゅんびでは、ふだんどこにおいてあるか知らなかつただい車を学校からかりたり、草ぬきをした人にプレゼントするためのペットボトルのジュースのダンボールをはこんだりしました。はこは 12 キロもありましたが、がんばってもちました。

つぎの日、草ぬきがありました。

草ぬきには、学校の先生やクラスのもだち、その家ぞく、ほかにもちいきの人など、たくさん的人がきていました。草ぬきはたのしかったけれど、とてもあつかつたです。

草ぬきがおわると、きのうママといっしょにはこんだジュースのはこをあけ、ジュースをみんなにくばりました。みんな、

「ありがとう。」  
と言いながらジュースをもらっていました。そしてママも、

「あつい中、草ぬきをしてくれてありがとう。」  
と言いながらジュースをくばっていました。どちらもうれしそうなかおをしていました。

夏休みにママの PTA のおしごとをてつだうことで、ママがどうしていそがしいのか、すこしわかりました。すてきなおしごとだと思いました。

## やっとお姉ちゃんになれました

長浜市立小谷小学校

3年

落川 紗帆

わたしは、8才になるまで一人っ子でした。ほいく園の年中さんになったころ、帰る時間になると友だちのお母さんが妹や弟をつれて友だちをむかえにくるので、わたしも妹がほしくなって、ママに時どき、

「赤ちゃんほしい。妹がほしい。」  
と言うようになりました。1年生になつたら、今までよりもっともっとほしくなりました。2年生になつたら

「ママ赤ちゃん生んで。今すぐ生んで。  
はよ生んで。」

と言っていました。すると、夏休みに入った夜に、ママがおなかの中に赤ちゃんがいる事を教えてくれました。ママの話を聞いて、やっとわたしもお姉ちゃんになれると思うと、とてもうれしくなりました。それからは、いいお姉ちゃんになれるように、図書館へ行った時は、お姉ちゃんシリーズをかりていっぱい読みました。読む前は、楽しいお話が書いてあると思っていたのに、読んでいくとお姉ちゃんって、がまん、とか書いてあつたので、ちょっとさみしい気持ちになりました。次にわたしが楽しみにしていたのが名前です。まだ赤ちゃんは男の子か女の子かわからないけど、わたしは女の子と決めていたので、わたしのすきな名前をいくつか紙に書いて、どれがいいか

考えていました。

2学きがおわるころ、クラスの友だちに、今ママのおなかの中に赤ちゃんがいて、来年の3月に生まれる事を話しました。すると友だちも自分の妹が生まれるみたいに、よろこんでくれました。3学きになると、ママのおなかも大きくなつて、ママがおふろからあがると時どき、「今赤ちゃん動いてる」

と言って、わたしにおなかをさわらせてくれました。わたしは、ママのおなかをなでながら

「お姉ちゃんだよ。早く出て来て。」  
と声かけをしながら、生まれてくるのを楽しみにしていました。予定日が来ても赤ちゃんはまだ生まれません。ある日、夜中に目がさめて、となりを見たら、ばあちゃんがいました。朝になって、なんでいたのかきくと、

「ママが夜中1時すぎにじんつうがきて、パパがママをびょういんへつれて行ったから。」

とばあちゃんが言いました。予定日より5日おそく生まれました。元気な女の子です。名前はパパとママとわたしの3人で考えて栄帆と決めました。栄帆の帆はわたしの紗帆の帆と同じです。今は上手にだっこ出来るようになったので、『夏休み3つのめあて』の仕事の所は、「妹のお世話をする」にしました。

本に書いていたように、がまんする事もあるけど、お姉ちゃんになれてとてもうれしいです。次の楽しみは、ママが妹をつれてじゅぎょうさんかんに来てくれることです。

## 自まんのひまご

近江八幡市立八幡小学校

3年 松井 律

「りつ、いつもがんばってるな。」

「また会いたいな。」

「りつはばあちゃんの自まんのひまごや。」

会ったり電話したりするたびに、こう言ってくれたのは、ぼくのひいばあちゃんです。ひいばあちゃんは1人ではなくらしていくのが心配だということで、ろう人ホームに引っ越しました。

ときどき会いに行って、ぼくががんばっていることを話しました。ひいばあちゃんは元気で、「がんばってくれてうれしいよ」とやさしく言ってくれました。「大きくなったな」と言って、ぎゅっとしてくれることもありました。コロナがはやったときは会いに行けなくなつたので、毎週電話をしました。学校のことや習い事のことを話すと、いつもほめてくれました。電話を切るときは、

「また会おうね。元氣でね。バイバイ。」

と言っていました。

そんなひいばあちゃんが、3月になりました。なくなる1週間前に、家族でびょういんに会いに行きました。ぼくは、「ひいばあちゃん、元氣かな」と思つて行きました。でも、今思い出してもなみだが出そうになるけど、ひいばあちゃんはずつと横になつ

ていて、今までとは顔も話し方もちがいました。ひさしぶりに手をさわったら、前よりもしわしわでした。あんなに元気だったのに、元気じやなくて、かなしくなりました。でもぼくを見て、いつものように、「大きくなつたな」と言ってくれました。

ひいばあちゃんがなくなったとき、ぼくはねつを出していて、お通夜には行けませんでした。でもみんなが、「ひいばあちゃんはりつのことを一番好きだったから、ぜつたいにおそうしきには来てあげて」と言ってくれていたそうです。

おそうしきでひいばあちゃんの顔を見たら、すぐになってしまいました。もう会えないし、おしゃべりできないし、かなしくてたまりませんでした。

ぼくはときどき、ひいばあちゃんが今何をしているかなと考えます。ぼくたちのことを見守ってくれているのかな。ぼくは知らないけど、ひいじいちゃんとなかよしだったらしいから、二人でなかよくおさけをのんでいるのかな。

ばあちゃんの家に行くと、ひいばあちゃんの写しんがおいてあるから、いつも手を合わせています。そして、心の中で、「天国で元氣かな。今、何をしているのかな。」と聞きます。そして、今までと同じように、がんばっていることを話しています。

ひいばあちゃん、ぼくはひいばあちゃんの自まんのひまごでいられるよう、これからもがんばるね。見守っていてね。

## わたしの大切な家族

彦根市立旭森小学校

4年 鹿田 実乃梨

わたしのお父さんは、5年間お仕事でフィリピンに住んでいました。そんなお父さんが今年、日本へ帰って来てくれました。

お父さんがフィリピンへ行ったその日の事は、正直あまりおぼえていません。でも、お父さんが行ったその日から、ご飯もお風呂もねる時も全部、わたしとお母さんとお兄ちゃんの3人になりました。

他の家庭は卒園式も入学式も、お父さんとお母さんが来てくれていて、少しうらやましく思いました。でも、わたしの周りには、いつもお母さんとお兄ちゃんがいてくれたので、さみしくはありませんでした。

とくにお母さんは、熱のある日も、頭がいたい日も、せんたく物や料理をしていて、とても大変そうでした。わたしはそんなお母さんを見て、少しでも役に立ちたいなと思い、洗い物のお手伝いやせんたく物と一緒にたたんだり、ご飯の支度のお手伝いをしたりして、お母さんを少しだけ助ける事ができました。お母さんに「あり

がとう」と言われるのがとてもうれしかったです。

そしてやっと、今年の4月にお父さんが帰ってきてくれました。お父さんがいてくれるので、遠くへの旅行も行けるようになったし、家族みんなでゲームやボール遊び、カードゲームなどができるようになりました。何よりうれしかったのは、家族全員そろって一緒に食べるご飯です。いつもよりもおいしくて、そして楽しく感じました。

わたしはこのけいけんを通じて、学んだ事が二つあります。一つ目は家族の大切さです。やっぱり家族1人でも欠けてしまったら、家の中がさみしくなるし、笑顔の数が少しへってしまうような気がします。二つ目は、自分が少しだけ成長できたことです。家族や友達がこまっているのを見た時に、自分から声をかけて、助ける事ができるようになりました。これからも、家族や友達を大切にし、笑顔のたえない生活が送れるようにしたいです。

## おばあちゃんのおにぎり

大津市立晴嵐小学校

4年 山崎 あさ

わたしはサッカーをしています。試合の時にお母さんがおにぎりを作ってくれますが、たまにたわらがたのおにぎりが入っています。

「家のおにぎりは三角やのに、なんでたまにたわらがたのおにぎりが入ってるん？」

と、わたしはふしぎに思っていたから聞きました。そしたらお母さんは、

「あさを守ってもらいたい時に、おばあちゃんのおにぎりを入れてんねん。」  
と言いました。試合できんちゅうしてたり、足をいためて見学だけ行ってた時におばあちゃんに守ってもらえるように、たわらがたのおにぎりを入れていたと教えてくれました。

わたしの母方のおばあちゃんは、わたしが生まれる2年前に60才でなくなりました。おばあちゃんには8人孫がいるけど、わたしだけがおばあちゃんに会ってません。わたしもおばあちゃんに会いたかったし、だっこしてもらいたかったし、おばあちゃんを知りたくて、お母さんにおばあちゃんのことを聞きました。

お母さんが子どものころ、おばあちゃんは仕事がいそがしくて、いっしょにいられなかつたけど、山や川に遊びに行く時は、おにぎりいっぱいのお弁当を作ってくれたそうです。山で山菜を探った

り、川で泳いだり、魚をつかまえたりしていて、おばあちゃんは何でもできたそうです。おじいちゃん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、親せきみんながお弁当を楽しみにしていたそうです。玉子やきは、おばあちゃんの玉子やきの味によくにてきたけど、おにぎりはむずかしいとお母さんは言いました。手に持つてもくずれないのに、食べると口の中でふわっとする、さい高においしいおにぎりだと教えてくれました。わたしはおばあちゃんのおにぎりが作れるようになりたいと思いました。

おばあちゃんのおにぎりは、水としおを用意して、手に水を少しつけてごはんを手の上にのせて、やさしくにぎって、しおを手のひらに少しのせて指で広げてから、ごはんをくるくると回して、さい後にまたにぎります。すぐににぎれるようになったけど、力が足りなかつたら食べたときにおにぎりはバラバラにくずれるし、くずれないように強くにぎると、食べたときにふわっとなりません。何回にぎってみても、おばあちゃんのおにぎりにならなかつたけど、味はよくにてると言われました。

家族で出かけた時、まだ練習中のおにぎりと、おばあちゃんの玉子やきにてる、お母さんの玉子やきを、おばあちゃんの形見の重箱につめました。おにぎりを食べたら、おばあちゃんと一緒にいるみたいな気持ちになれてうれしかったです。いつかおばあちゃんのおにぎりを作れるようになって、みんなで食べたいです。

## 僕を支えてくれる家族

長浜市立塩津小学校

5年 樋口 結大  
ひぐち ゆいと

僕は赤ちゃんの頃から舌にできものがあり、今年の夏休みに切除する手術のため、1週間大津の病院に入院しました。

僕の記憶にある中で、こんなに長く家を離れたことは、今まで一度もありません。入院中は、お母さんが付き添っていてくれたけれど、家から遠いし、病院の決まりで面会制限があり、誰にも面会に来てもらえませんでした。入院前は、お母さんがいてくれるし、1週間家族に会えないことを、何も思っていませんでした。実際、病室は個室でリラックスして過ごせるし、時々苦手なものは出るけれど、栄養バランスを考えられ、手術後の僕でも食べやすいように調理された美味しいご飯が、時間になつたら部屋まで運んでもらえるし、毎日病院の人が掃除してくれて部屋はいつもきれいだし、お医者さんや看護師さんは優しいし、嫌なことは手術をしたあとが時々痛いだけで、お母さんに、「ゲームばかりしていないで、勉強しなさい。」とか、

「部屋を片付けなさい。」

というふうに怒られることはないし、遊んでいてもすぐ喧嘩になってしまって、正直うつとうしいなって思ってしまう弟はいないし、僕が楽しんでいると思って余計なちょっかいをかけてきて、相手をするのが少しめんどくさい時があるお父さんもいないし、割と快適だな、どうせならお母さんも帰ってくれてもいいのに、と思っていました。

けれど、退院になると栄養バランスの考えられた健康的な食事はなんだか物足りないし、決められた起床・消灯時間、慌ただしく入るお風呂、僕が快適に過ごせるためだとわかっていても、1日に何度も入

れ替わり立ち替わり、知らない人が病室に入ってくることにストレスを感じて、イライラすることが増えていました。

そんな時母方のおばあちゃんの家で留守番をしていた弟からメッセージがくると、面白いことが書いてあつたりして、楽しい気持ちになり、自然と笑顔になりました。お父さんも、入院中に僕が少しでも退屈にならないように、毎日1袋ずつ渡せるように、僕が好きなカードゲームのパックを準備して、お母さんに渡していてくれて、僕のことを考えていてくれるんだなということが伝わってきて、嬉しかったです。そしてお母さんは、僕が安心して過ごせるように、お母さんにとっては決して快適ではない病院生活を、嫌な顔をせずに、一緒に過ごしてくれました。やっぱりお母さんがいてくれて良かったと思いました。

退院して家に帰ることができた時、普段は仕事が忙しくて、家事なんてほとんどしていないお父さんが家のこともきちんとしていくくれたみたいで家がきれいでおどろきました。1週間ぶりに会う弟は、僕が話すすきがないくらい話し続けていて、おばあちゃんから送られてくる写真では楽しく過ごしているように見えたけど、やっぱり淋しい思いをさせていたんだなと思いました。おじいちゃん、おばあちゃんは僕の退院をすごく喜んでくれて、2人の笑顔を見た時、家に帰ってきたんだなとほつとしました。そしてお母さんは、退院してからも、柔らかくしげきの少ないものしか食べられない僕のために、食事面で気をつかってくれたり、痛みがないか傷口に変わりがないか、いつも気にかけてくれています。

僕はこの入院生活を通して、いつも家族に支えられていること、いつも家族から安らぎを与えてもらっていること、そして、家族と過ごす何気ない日常の楽しさに気づくことができました。僕も、家族の一員として、みんなを支えられるような自分になりたいです。そしてこれからも家族みんなで楽しく過ごしたいです。

## 私の自慢の祖父母

彦根市立鳥居本小学校

6年 平田 雪七

はなれて暮らす私の祖母は、会いに行くと、必ず私の体調を気にかけてくれます。そして、帰る際には必ず外に出て車が見えなくなるまで見送ってくれます。そんな風にいつも私の体調を気にかけてくれたり、帰る際ずっと見送ってくれたりするのには理由があります。

それは、祖母が中学生の時に、お母さんを突然の心臓発作で亡くしたからです。祖母が中学校に行っているときの出来事で、突然の別れがありました。その日の朝、お母さんは朝早く出かける用事があり、祖母は起こされてもねむくてなかなか起きれず、顔を合わすことが出来ませんでした。

何故あの時ちゃんと起きなかつたのか、何故あの時起きて言葉を交わすことができなかつたのか、約60年経った今もずっと後悔していると言っています。

祖母は「いつ何が起こるかわからないから、1日1日を大切に後悔しない様に過ごさないとね。」と言っています。実際同じことが自分に起こったら「1日1日を大切に後悔しない様に。」という言葉はなかなか浮かんでこないと思います。そうやって祖母は何事にも前向きにがん張ってきたのだと思いました。

私はそんな祖母に大切なことを沢山教わりました。「心がきれいな人ほど表情、行動にも出てくる。」「人に優しくした分だけ自分に返ってくる。だから色々な人に優しくしてあげてね。」この言葉は祖母が大事な人を失ったからこそ出てきた言葉だと私は思っています。どんなに私がわがままだとしても、祖母はそこも私の一部として優しく接してくれます。時にはきびしい祖母ですが、そこも私のことを思ってくれている証拠もあるし、愛情だと思います。

そして今、祖母は難病と闘っている祖父の介護をしています。祖父は、パーキンソン病という、体の動きに障害があらわれる脳神経の病気を患っています。この病気は、薬と運動をすることでしか進行を遅らせることができません。少しづつ体が不自由になっていく祖父を祖母は、約10年介護をしています。

今まで出来ていた事がだんだん出来なくなったり、体の動きが固まって、今では歯磨きやひげ剃りなど朝の身支度には、約2時間かかってしまいます。しかし、その全てを祖母は手伝うわけではありません。時間はかかってしまうけど、祖父自身で出来ることはリハビリとして、必要な時だけ手伝う。そんな風にいつも優しく祖母は祖父を見守って生活しています。そんな祖母の姿を見ていると、祖父に対する優しさや思いやりを感じ、心が温かくなります。

祖母は、介護をするのはとても大変だけど、「与えられた一度きりの人生を受け入れて、精一杯頑張ろう。」と言っていつも笑顔で過ごしています。

祖母が祖父の介護で大変な中、私ができる最低限のことはしなくてはいけないと思っています。以前、祖父の介護のお手伝いをしたとき、少し手伝っただけでも大変でした。それ以上のことを祖母は毎日していると考えると祖母の体もとても心配です。

祖父も私に会うといつも笑顔で、「いらっしゃい。元気にしてたか?」、帰り際には「また、遊びに来てな。」と、不自由な体にも関わらず、玄関先まで来て手をふって見送ってくれます。

こんな幸せな日常がいつまで続くかわからないからこそ、祖母の言葉を頭の中に入れて貴重な1日1日を大切に過ごそうと思いました。そして、今までずかしくてあまり言葉にできなかつた私ですが、これからは自分の気持ちを言葉にして伝えようと思います。

「おじいちゃん、おばあちゃん、いつも私のことを大切してくれてありがとう。私はおじいちゃん、おばあちゃんの孫で幸せです。」

## 沖縄の海が教えてくれたこと

彦根市立城西小学校

6年 深尾 俊斗

この夏休み、家族で沖縄に行きました。一番楽しみにしていたのは、海でのシュノーケリングです。海に入ると、そこはまるで、別世界のような景色が広がっていました。

ゴーグルごしに見える海の中は、光が差し込み、キラキラとゆれる水面のもようが、さんごしょうを照らしていました。赤やピンク、オレンジなど絵の具では作れないような色のさんごが岩のように広がり、その間を小さな魚から大きな魚まで、さまざまな形や色をした生き物が自由におよぎまわっていました。海の中はまるで魚たちの町のようでした。ぼくはむちゅうでその光景を目に焼き付けました。

しかししばらくおよいいでいると、水の中に白い小さなかけらがたくさん浮いていました。近づいて、手に取るとそれは、発泡スチロールのくずでした。最初は何だろうなと思いましたが、ガイドさんが「これは人間が出したゴミがこわれた物なんだよ」と教えてくれました。さらに、「魚やウミガメがこれを食べてしまい、お腹の中で消化できずに死んでしまうこともあるんだ」と聞いて、ぼくはとても悲しくなりました。あんなに美しい海にも、人間の出すゴミが入りこみ、生き物たちの命をおびやかしている現実を初めて知ったしゅん間でした。

きれいな海と、そこに住む生き物たちは、人間が守っていかなければならぬと強く思いました。ぼくは家に帰ってから家族と「ぼくたちにできること」を話し合いました。

一つ目は、ゴミをポイ捨てしないことです。道や川に捨てられたゴミは、雨や風で流されて、やがて海に

たどり着きます。海だけをきれいにしようとしても、陸地や川が汚れていれば意味がありません。だから、身近な場所をきれいに保つことが海を守ることにつながります。

二つ目は、ゴミをへらす努力をすることです。ぼくたちの生活の中には、使い捨ての物があふれています。レジぶくろやペットボトル、ストローなどを出来るだけ使わないようにすれば、ゴミの量をへらすことができます。スーパーに行くときは、マイバックを持っていったり、ペットボトルではなく水とうを使ったりします。使い捨てのものを出来るだけ使わないようにすれば、ゴミもすくなくなります。

三つ目は、自然や環境について学び、知識を深めることです。ぼくが今回の旅行で感じたように実際に見て、知って、心が動く経験はとても大切です。知れば知るほど守りたいという気持ちが強くなります。テレビや本、インターネットで情報を調べるだけでなく、自然の中に出かけて体験することも必ようだと思います。

ぼくは、今回の旅行できれいな海や魚たちのすばらしさと、人間の出すゴミのこわさの両方を体験しました。この2つを知ったからこそ、自分の生活や行動を見直そうという気持ちが強くなりました。家族と意見をかわすことで、一人では気付けなかったことも学びました。お父さんは「環境守ることは未来の人たちへのおくり物だよ」と言いました。その言葉はぼくの心中に深くのこっています。

豊かな心は、楽しいけいけんやうつくしい物を見たときに生まれると思います。でも、その心を育てるためには、自然や生き物たちを、大切にしようと言う気持ちも必ようです。ぼくはこれからも家族といっしょに、自然を守る行動をしていきたいです。そして未來の子供たちにも、同じように美しい海や自然を見せられるようにしていきたいです。

## ぼくのお父さん

### 大津市立晴嵐小学校

6年 山崎 祥章

ぼくのお父さんは、家族以外の人からは、おとなしくて、いつもニコニコしていると思われています。ぼく達のサッカーの送りいをしてくれますが、車から降りて来ることはほとんどありません。試合の日は、落ち着くように声をかけてくれて、バイバイしたら、家の用事に帰ったり、買い物に行ったりしてくれます。むかえに来てくれた時は、今日の試合のことをやさしく聞いてくれて、その後にコンビニでおにぎりと冷凍フルーツを買ってきます。車の中でいっぱい話しながら帰ります。うれしかった日も、悲しかった日も、その時間があるから、家に帰るまでには落ち着けます。試合の日のお父さんはそんな感じです。

自主練の日は、お父さんは車から降りて来てくれてぼくがシュートをする時はキーパーをしてくれたり、一対一の相手をしてくれたり、パスの練習をしてくれます。ぼくと話したことと、試合の動画を見て、ぼくのサッカーをよく分かってくれています。

ぼくは去年おじいちゃんが亡くなる前はおじいちゃんとぼくのことしか考えられませんでした。家族みんながおじいちゃんのために動いていました。おじいちゃんが亡くなった後は、法事がいっぱいあっていそがしかったけど、一周忌が終わった後に思い出したことがあります。それは、おじいちゃんのおそう式の後にお父さんがすごく泣いて立ち上がりになくなって、おっちゃん2人がお父さんを部屋に連れて行ってくれたことです。そんなお父さんを見たのは初めてでした。お父さんは、「おとんのためにもっとしてあげたかった。」と泣きながら言っていました。ぼくは、お父さんはいつも、おじいちゃんとおばあちゃん、ぼく達家族をずっと大事に守ってくれていたと思います。自分の

やりたいことはせず、見たい番組1つを年に20回くらい見るだけで、それだけがお父さんの楽しみだと思います。それ以外はずっと家族のために動いてくれます。ぼくはお母さんに、何でお父さんは家族のために動いてくれるのか聞きました。

お父さんは4人兄弟で、お兄ちゃんが2人と妹がいます。お父さんは子どものころはとても体が弱くて、おとなしかったので、おじいちゃんは気にしていたみたいです。おじいちゃんはスーパーで働いていて、平日しか休みがなかったけど、きっと茶店でココアを飲ませてくれたり、バイクでプラモデルを買いに連れて行ってくれたそうです。

お父さんはいそがしくても気にしてくれるおじいちゃんに感謝したそうです。だから、自分ができることを手伝ったり、車を買ってからはおじいちゃんやおばあちゃんを仕事に送ってあげたり、ひいおじいちゃんのお世話をするおばあちゃんの送りいをしたりしていました。おじいちゃんが体が悪くなって、動けなくなってからは、お父さんはできることを一生けん命やっていて、ぼく達もやりました。なぜかと言うと、ぼくはお父さんが家族のために一生けん命動いてくれるのを見てお父さんに感謝していましたし、お父さんのようにやさしい人になると決めたからです。お父さんはおそう式の後に泣いていたけど、お父さんはいっぱいしてあげたと思います。

そんなお父さんになろうと思って、いそがしいお父さんとお母さんのためにお手伝いをがんばることにしました。勉強とサッカーもがんばって、今年の夏休みには、サッカーのカップ戦で、ゆうしゅう選手賞をもらうことができました。その時お父さんを見たら、後ろの方で喜んでくれていました。ぼくがお父さんにお礼を言うと、

「自分ががんばったからやで。よくやった。」  
と言ってくれました。

これからもがんばって、お父さんのようなやさしい人になりたいと思います。